

乞うご期待！阪哲朗＋立響の『ドヴォ8』

今度の定期は12月17日、びわ湖ホールです。

第108回定期演奏会に向けて。

今年のびわ湖ホール定期は、ドヴォルザークとブラームスの人気曲となりました。指揮はおなじみの阪哲朗氏。昨年のサマーコンサート(大阪・いずみホール)での「新世界」の素晴らしい指揮ぶりを思い出される方も多いことでしょう。学生指揮は今夏のサマーコンサートでめざましい成長ぶりをみせてくれた高倉寛人がつとめます。

立命館大学交響楽団第108回定期演奏会

日時：2012年12月17日(月) 18時開場 19時開演

会場：びわ湖ホール大ホール

指揮：阪 哲朗 高倉寛人(学生)

曲目：ドヴォルザーク 交響曲第8番ト長調 ブラームス ハイドンの主題による変奏曲 ブラームス 大学祝典序曲

■演奏曲誌上プレビュー

大 学祝典序曲という名を知らない人でも、この曲を聴けばわかるという人は多いだろう。いや、むしろ懐かしいとさえ感じる人も多いのではないだろうか。それもそのはず、この曲の第2主題は「大学受験ラジオ講座」のテーマ曲であり、またその放送を知らない世代であってもテレビ番組などのBGMなどでよく耳にする、日本人にとってはおなじみの曲であるからだ。

そもそもこの曲は作曲家ブラームスがドイツ・ブレス



ラウ大学から名誉博士号を授与された返礼として作曲されたものであり、当時の四つの学生歌に加えさらに自作の主題や接続を取り入れた演奏会用序曲である。今でいえば各大学の校歌をつなぎ合わせたようなものといった

ところだろうが、それだけにはとどまらないブラームス特有の優れた技巧によってそれらが構成されており、ブの天才ぶりを見ることができる。さらに面白いことに、同時期にこの曲とは対照的に悲愴感あふれる「悲劇的序曲」を作曲しており、この「大学祝典序曲」を笑いの序曲、「悲劇的序曲」を泣きの序曲としたブラームスのユーモラスな一面もうかがえる。そんな遊び心満載の背景も、この曲が私たちにとってなじみ深く感じる理由の一つな

立響楽信 35

2012.11

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学交響楽団 ruso_info@yahoo.co.jp

のかもしれない。(文責：学生指揮者 高倉寛人)

ウ ェーバー、レーガー、ヒンデミットなど、いろいろな作曲家がオーケストラのための変奏曲を作っているが、その中でも特によく知られ、演奏される機会の多いのがこの作品である。通常、変奏曲といえば最初に主題が提示され、それが徐々に変形し、最後には華麗な形で変奏された主題により締めくくられるというものである。しかし、ハイドンバリエーションはそれとは異なっている。主題と8つの変奏の後に来る終曲は、それ自体が変奏曲になっている。しかも、その変奏が進んだすえ、最初の主題に戻る、つまり逆変奏になっているのである。なお、この曲は最初にピアノ連弾用の曲として書かれた後、オーケストラ向けの曲として変奏されたといわれている。しかし、作品番号はオーケストラ用が56a、ピアノ連弾用が56bとなっている。

主題 まずアンダンテのテンポで親しみやすい主題が演奏される。弦がピツィカートでリズムを演奏する上にオーボエを中心とした木管楽器群がふくらみのある響き

で讚美歌風のメロディを奏でる。

第1変奏 主題第2部に出てきた変ロ音の連続で始まる。この反復はこの変奏中に何度も現れ、曲は次第に対位法的になり、立体感を増して行く。

第2変奏 この変奏は、暗い情熱を秘めたように演奏される。主題の付点リズムを利用して強弱の変化をつけており、また、ここでも変ロ音の反復が出現する。

第3変奏 この変奏と次の変奏は、緩徐楽章風になる。明るくのどかでロマン的な美しさを持ち、対位法的に展開していく。この変奏から第5変奏までは、テンポが遅いためなのか、第1部と第2部の繰り返しは行われない。

第4変奏 オーボエとホルンに新しいなだらかなメロディが演奏される。弦楽器が細かい動きで対位法的に加わってくる。

第5変奏 オーケストラ全体が疾走するに動く変奏になっている。次の変奏と合わせて少しおどけた風の性格を持っており、スタッカートと強弱の付け方が印象的である。

第6変奏 ホルンとファゴットが生き生きとして軽快な変奏を演奏して始まり、弦はピツィカートで伴奏する。

第7変奏 再び緩徐楽章風になり、シチリア舞曲風ののどかな変奏となっている。

第8変奏 暗く情熱的な短調の楽章である。次の終曲への橋渡しのな変奏となっており、弦楽器は活発に動き、管はそれと交替しながら進む。全体に神秘的なムードが漂い、この変奏の第2部でも変ロの持続音が聞かれる。

終曲 全曲の結びとなるスケールの大きな楽章である。パッサカリヤという変奏曲形式で出来ており、主題は変奏曲全体の主題から導かれた5小節ほどの荘重なものになっている。この主題が18回繰り返され、その上に新しい音楽が対位法的に絡んでくる。最後のテンポ変化には是非注目していただきたい。トライアングルなども加わり、輝かしく全曲が締めくくられる。ブラームスの、敬愛するハイドンとのいわばコラボレーション、楽しんで頂きたい。(文責：副学生指揮者 藤本直也)

ドヴォルザークのゴミ箱をひっくり返せば交響曲が一つ書けてしまう—と師匠ブラームスに
いわれるほどメロディーメーカーであったド
ヴォルザーク。中でもこの交響曲第8番はチェコ・ボヘ

ミアの風景や民族調が目に浮かぶようなフレーズが織りなす、そのドヴォルザークのメロディーメーカーぶりがいかんなく発揮された、最もドヴォルザークらしい曲であるといわれる。しかし同時に、それはドヴォルザーク自身が音楽界に生き残るため、そうせざるを得ない音楽史上の背景もはらんでいたのだ。



初期のころはワーグナーを仰いでいたものの、後に師をワーグナーとは対立するブラームスに変え、ブラームス派を継承しようとしたドヴォルザークであるが、その手法はベートーヴェンより続く古典主義的な形式美を尊重するものであった。師ブラームスはその手法により、4つの交響曲によってその自らの世界を確立し、ドヴォルザークも交響曲第7番によってそれを踏襲しようとするものの、その後それはもはや時代遅れの手法といわざるを得ないという現実をドヴォルザークは突き付けられることとなる。そのような中で自らのメロディーメーカーぶりを発揮し、ブラームスの手法を受け継ぎつつも、同じチェコの作曲家、スメタナより続くチェコ国民楽派を確立することで、独自の世界を切り開いていった交響曲こそがこの交響曲第8番なのであり、まさに音楽家としての生き残りをかけて生み出したドヴォルザークの傑作であるといえる。それ故なのだろうか、はじめて聞いてもどこか懐かしく聞こえてしまう、そんなドヴォルザークの世界をこの交響曲で存分にお楽しみいただけることだろう。

第1楽章 冒頭メランコリックなチェロの旋律はどこか郷愁を漂わせていくが、その後のフルートのフレーズに続き一転迫りくるような主題の後、フルートとクラリネットによって第二主題が奏され、一度冒頭の旋律に戻されたのち躍動感あふれる展開部および再現部を経て力強く終止する。

第2楽章 弦楽器による冒頭の主題ののち、小鳥の鳴き声を思わせるようなフルートをはじめとするフレーズ

と、それとは対称的に民族的にさえ感じられるような三度の進行によるクラリネットの旋律とが掛け合いを見せる。その後下降音型とともに木管楽器やヴァイオリンソロなどによって朗々と歌い継がれる中間部を経て、再びはじめの主題とともに名残惜しむかのように旋律が歌われ、静かに終止する。

第3楽章 映画音楽を思わせる感傷的な旋律の宝庫ともいべき第3楽章は、弦楽器、木管楽器双方によってうねりを作り上げた後、トリオによりドヴォルザーク特有の民族的リズムとともに、フルートとオーボエによる田園風景の浮かぶような穏やかな旋律を経て、再度冒頭の主題が繰り返されたのち、活気あふれるコードによって締めくくられる。

第4楽章 冒頭トランペットによるファンファーレに続き、弦楽器による主題およびその変奏を経たのち、全体合奏により躍動感あふれる主題に受け継がれ、フルートの技巧的ソロおよび木管楽器による民族的旋律へと進み、再びテンポを緩め変奏曲としての構成をなす。その後、再度全体合奏による主題ののち華々しいクライマックスを迎える。(文責：学生指揮者 高倉寛人)



Vn. 文3 早瀬 昌子 です。

第108回定期が近づいてまいりました。強化合宿も終え、私も、みんなも、本番に向けて準備が整ってきております。トレーナーの中

橋先生も懸命にご指導いただいています。今回の定期も、きっと阪先生のご期待に応えるいい演奏になることでしょう。残り一カ月、更に更に練習に励みますので、皆さま、是非ご来場くださいませ。

大分公演を応援してください。

前号でもお知らせしました大分公演が迫ってきました。従来の定期演奏会とは違う新しい演奏活動を楽団のさらなる飛躍の糧とすべく、団員一同、確かな目的意識を持ち、有意義な演奏旅行としたいと考えております。指揮は第108回定期に続いて阪哲朗先生にお願いしております。APU交響楽団や大分大学医学部管弦楽団などとの様々な音楽交流も予定しております。九州のOB・OGの皆さまをはじめ多くの皆さまのご来場をお待ちしております。
(大分公演実行委員会 代表 梶井 亮)

伊吹新一先生、ご逝去のお知らせ

去る7月26日、本学楽団創設指揮者、伊吹新一先生がご逝去されました。

伊吹先生は昭和24年本学法学部ご卒業後、音楽の道に進まれ、京都市立芸短大(現京都市立芸大)で指揮法を斎藤秀雄先生に師事、芸短大ご卒業後は、京都市立堀川高校音楽科・京都市立芸大などで教鞭をとられ、演奏活動、音楽教育の両面で大きな足跡を残されました。享年87歳。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

**第108回定期以降の立響と関係団体の演奏会です。
詳細はHP等でご確認をお願いいたします。**

マグノリア室内管弦楽団第5回定期演奏会

日時：2013年1月6日(日) 14時開演

会場：京都府立府民ホールアルティ

指揮：藤田和宏 岡田健太 独奏：亀山 甫

曲目：メンデルスゾーン 序曲『静かな海と楽しい航海』
ハイドン 交響曲第94番ト長調『驚愕』 リムスキー・
コルサコフ 交響組曲『シェヘラザード』

立響・フェアウェルコンサート

日時：2013年2月10日(日) 17時開演予定

会場：大津市民会館 曲目：未定

立響・大分公演

日時：2013年2月27日(水) 19時開演

会場：大分市 iichiko グランシアタ

指揮：阪 哲朗 高倉寛人(学生)

曲目：ドヴォルザーク 交響曲第8番ト長調 ブラームス
ハイドンの主題による変奏曲 ブラームス 大学
祝典序曲

立響・109回定期演奏会

日時：2013年6月7日(金) 19時開演

会場：京都コンサートホール大ホール 曲目：未定

衣笠交響楽団定期演奏会 -第21回京都公演-

日時：2013年7月6日(土) 開演時刻未定

会場：京都コンサートホール大ホール

OB会ホームページを開設しました。

このたびOB会ではホームページを開設しました。今後、立響をはじめ関連情報を迅速にお知らせいたします。ぜひアクセスしてください。Facebook も利用できます。

→ <http://rusoob.web.fc2.com/>

OB 総務のアドレスをご利用ください。

立響OB会専用のメールアドレスを開設しています。住所変更等のご連絡に是非ご利用ください。立響OB総務が運用しています。→ obsoumu.ruso@gmail.com

メーリングリストにご登録ください。

寺田卓矢常任理事にご尽力いただき、会員相互の情報共有や交流を一層促進するため、メーリングリストの運用をしています。

→ sibelius.nr.5@gmail.com

立響は平成 27 (2015) 年に創立 60 周年を迎えます。

OB会では60周年を立響およびOB会活動の一層の発展を願い、創立60周年記念事業を計画しています。実行委員長は副会長の西田廣士常任理事です。

『響き立つ』を頒布します。

50周年記念誌『響き立つ - ある青春オーケストラの軌跡』を頒布します。立響OB総務宛に、ご氏名・住所・電話番号・卒団



年を明記、手紙かEメールでご連絡の上、OB会口座にご入金ください。頒布価格は1,500円です。

OB会年会費は5,000円です。

会員各位におかれましては、何卒ご理解とご協力をお願いいたします。また「郵便自動払込」を進めています。他の金融機関支店・ATM(コンビニ等を含む)からの振り込みも可能です。振り込みの際には、卒業年を確実に記載してください。→ ゆうちょ銀行店番 448 普通預金

9306461 立命館大学交響楽団OB会

ご冥福をお祈りいたします。

高田 公一 様(S43・経 Tp.) 2011年11月18日

中溝 正文 様(S43・法 Vn.) 2011年12月4日



好・評・連・載

吉田興三郎のレコード棚

ドヴォルザーク 交響曲第8番ト長調作品88

「コガネムシ交響曲」とも、おわかりですか?第4楽章の中間部で始めは遠慮気味に、しばらくすると大音量でコガネムシのテーマが鳴り響きます。いささか下品!第3楽章冒頭は、ブラームス第3番・3楽章に匹敵するほどの、ドヴォルザーク一世代の超美しいメロディが!!! この演奏はI・ケルテス/ロンドン交響楽団で決まり。ケルテス盤は高校生時代からの、ほぼ50年来の愛聴盤です。

年配の方はブルーノ・ワルターの演奏が懐かしいと思われますが、ワルターの場合、ステレオ録音のコロンビア交響楽団との演奏は、オーケストラの編成が小さく演奏も平凡。それに比べてモノラル録音ですが、ニューヨーク・フィルとの演奏は、(特に第1楽章)何かにとり憑かれているような凄まじい演奏。あまりの違いにビックリです。僕はコロンビア交響楽団との録音は全てなかった方が良かったのでは…と思っています。(例外はマーラーの第1番)但し、1950年代のモノラルでのコロンビア交響楽団はニューヨーク・フィルやNBC交響楽団等のメンバーで素晴らしい演奏をしています。例えばモーツァルトの25番や35番「ハフナー」。



オーケストラの凄い演奏を聴くならば、R・クーベリック指揮のベルリン・フィルで決まり。指揮者の解釈などはともかく、各楽器の上手さは格別なものがあります。ドヴォルザークは第9番もそうですが、全ての楽器が満足できるように気を遣う作曲家です。

N・アーノンクール指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団(旧アムステルダム)は今までにないアプローチで演奏しています。

最近聴いた中では、テンシュテット指揮ロンドンフィル1991年・ライブの演奏にえらく感動しました。指揮者とオーケストラとの相性のよさが大きな要素だと思います。

たしか数年前この「楽信」に同じような文を書いたような気がしますが?。

吉田興三郎 (S46 Tb. 箏演奏家)